大阪日々新聞紙

第九二号

静岡縣下我入道村の漁師後藤文五郎が一子
徳藏八明治八年十六才のころ或夜網を引んとて今一人の若者と両人船に
のり込んで闇の世ごうまぎれに夜ハ沖へあ船出しして
一番場所を取らんとてまぢ〳〵浮森のかゞ〳〵くらい中を
呼声ふと目を覚し〳〵くらくを見まわしいるふ澈く
る大海の荒浪逆まき動揺せりそやと両人櫓を
あ〳〵とかゝて闘へ〳〵罰当の者ハカのかぎり押
くれば逆浪おそれ徳這が櫓をへのをとして折
折るまづく櫓ゾクそ脇の脇を突ぶりあぐ
櫓をうへひろやぐあ〳〵切る所へ
きくひの船〳〵漕よぶふ徳
這ハこれ誤つて腹をぶりこそ
あとづゞと云ふ近う見ふ
腸三尺ばかりめけ出し〳〵べ連れこそ西の治療
終ろ這顔色ばかりなく腸かゝるふ苦痛を見せぬ実
剛気の壮者ろと報知六百七十二号〳〵記せり

因て云 櫓ゾクをふぶりあや指を上へ立て其を話
怪我ありと古く云つくくるを船のくくこと

小信改二枚
夏恵堂

御寄書
富士屋板

市り九一